

技術生かし地域に貢献



車が走る、曲がる、止まるための基本性能に関わる自動車部品を製造する「鈴木化学工業所」（幸田町六栗）。コロナ禍をきっかけに、同社の技術を生かした製品づくり、地域貢献といった新たな取り組みを始めた三代目の小幡和史社長（五）は「誠実みのある人間が信頼される製品、会社をつくる」と話す。

主に自動車のボンネットの中に使われるプラスチック部品を手がけ、国内の自動車メーカー向けに燃料タンクや冷却水パイプなど大小四百種類以上の部品を製造している。

小幡社長によると、電気自動車（EV）の普及に伴い、より

幸田「鈴木化学工業所」 ■ プラ新製品

少ないエネルギーで長い距離を走れるようにするため、部品の軽量化が求められるようになってきた。部品の多くは「金属製からプラスチックなどの樹脂製への置き換わりが進んでいる」とい

う。しかし、二〇二〇年に新型コ



自社製品をPRする小幡社長―幸田町六栗の鈴木化学工業所

ロナウイルス感染拡大の影響で、自動車の生産台数は減少し、同社の工場も減産体制に。「仕事の量は減り、社員も心なしか元気がない状態だった」と当時を振り返る。

それでも「何かできないか」と、プラスチックの加工、成形技術を生かして、同年春、フェースシールドやパネルなどの新製品の開発に挑戦。完成した製品は町にも寄贈した。

同年夏には、地元の豊坂小学校、南部中学校の児童生徒のために、熱中症対策として、通学路にウォーターサーバーを設置した。翌年からは豊坂小の児童を工場見学で受け入れ、モノづくりの面白さを伝えている。

小幡社長は「時代の変化に合わせて、新たなことに挑戦しながらも、誠実に実直なモノづくりを続けていくことに変わりはない」と語った。（服部壮馬）

鈴木化学工業所 幸田町六栗左右作2の1。1952年に岡崎市で創業、2012年に幸田町に移転。自動車部品のほか「えこたん」キーホルダーや軽くて丈夫で壊れにくい素材が特徴の「十年急須」なども製造する。同社オンラインストアなどで購入できる。